

「イエス・キリストの僕」(ローマー・一〇七)

1 使徒パウロ

今日から、三月末まで、使徒パウロの「ローマの信徒への手紙」(ローマ書)を講壇で取り上げます。

この手紙をご一緒に読む中で、信仰の、あるいは教会の、色んな基本的なことが改めて確認される、あるいは新しく知るようになると思えば、幸いです。

分かりにくいところもあるかも知れませんが、初歩的なことにまで戻って、一から理解できるように努力したいと思います。

今日の箇所は手紙の書き出しです。「挨拶」(聖書の見出し)です。ゆるぎない一つ一つの言葉に圧倒されます。しかしここには、手紙の書き始めとして、だれが、だれに、何のために書くのか、そうすることが当然に含まれています。それをはっきりつかまえることが、差し当たり大切です。

キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから(一節)。

神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ(七節)。

「パウロから」、そして「ローマの人たち一同へ」。この最初と最後の節から、パウロが手紙の筆者であること、宛先はローマの聖徒たち、ローマの教会に集っている人たちであることが、分かります。

こうした筆者と宛先、これが分かっただけでも、いろんな問いが浮かんできます。例えばパウロはどこでこの手紙を書いたのだろうか、どういう状況で書いたのだろうか、パウロはローマの教会を知っているのだろうか、一度でも行ったことがあるのだろうか、等々です。

そうしたことも念頭において、パウロという人物について、最初に短く申し上げておくことにします。

このパウロという人、キリスト教が現在のようになる上で最大の貢献をした人といってよいと思いますが、彼はよく自分のことを語った人でもありました。いろいろに語った。しかし結局は、一つのことを、くり返しそこに立ち返って語った人のように思われます。その一つのこととは何かといえば、回心というか、回心させられたこと、キリスト教の迫害者から伝道者へという、少し平凡すぎる言い方になってしましますが、そういう実体験です。

彼の書いたこと、語ったことはすべてがそこへと収斂し、すべてはそこから出たものです。証し(証言)といってもよいでしょう。それが、残された彼のたくさんの手紙となったのです。新約聖書に二十一の手紙と呼ばれるものがあります。そのうちの半分以上十三の手紙が、真筆「本人の書いたもの」でないものも含めて、何らかの意味でパウロに関係のあるものです。

さていま言ったパウロの回心とは、使徒言行録に、それぞれ違った形で、三度記されています（九、二二、二六章）。

パウロの名前がはじめて出てくるのは、キリスト教徒の迫害者としてでした。ステファノがエルサレムのユダヤ教指導者らによって石で打ち殺されたとき、迫害者たちの着物の番をしていた若者として登場します（使徒七章）。このパウロが、三十歳のころ、なおもキリスト者を脅迫し、殺そうとしてダマスコの町に向かっていたとき、突然天からの光に照らされ地に倒れ、復活のイエスの呼びかける声を聞いたというのです。詳しいことは申し上げませんが、これが回心のきっかけになった出来事です。その後ダマスコの町でアナニアというイエスの弟子から洗礼を受け、ペトロやヤコブなどもやがて交わりをえて、シリアのアンティオキアを拠点として、世界伝道者として活躍し始めます。

パウロがローマの信徒への手紙を書いたのは、だいたい紀元五〇年代の終わり頃のこと、コリントの町で、と言われています。年齢は五〇才代の終わりごろであったでしょう。

ローマの信徒への手紙を認めた事情に、彼は、手紙のはじめと終わりで言及しています（一章八節以下と一五章二二節以下です）。簡単にいえば、こうです。福音の使徒として地中海世界を三〇年近くかけ巡ってきて、彼は今、とくに地中海東部の自らの伝道の使命は終ったと考えています。そこでさらに地中海西部「イスパニア」（一五・二八）に伝道したいと、強い願いを持つようになっていたのです。そのために帝都ローマを経由し、ローマの教会に送り出されてスペインにまで伝道するという大きな計画を立てていたのです。彼の伝道プランはいつもまだ福音の種が蒔かれていないところがありました（一五・二〇）。

そのためのローマ行きを彼はこれまで何回か企てたようです。しかし道は開かれませんでした。しかしいま実現の可能性が出てきたと感じたのでしょうか。しかしローマの教会には、パウロを知らない人もいます。そこで彼は、彼の福音理解を示して予め理解を得ておこうとしたのです。そのようにして書き記されたのが、ローマの信徒への手紙でした。

「わたしの福音」という言い方がこの手紙に何回か出てきます（二・一六）。それはいま申し上げたような事情から理解できる言い回しです。もちろん「わたしの福音」というのは、これは私なりの私的な福音理解だというわけではありません。そうではなくてパウロも受けて、それをさらに伝達しようとしている、すべての者がそれによって救われるべき福音です。いや、何より、それによっていま自分が生きている、生かされている福音、それが「わたしの福音」なのです。

2 キリスト・イエスの奴隷

それならパウロは、福音によつていま生きている、生かされている、この「わたし」をどのように捉えているのでしょうか。それを明らかにしているのが、先ほども上げたローマ書の冒頭の言葉、一節です。

キリスト・イエスの僕、神の福音のために選出され、召されて使徒となったパウロ・・・（一節）。

これは筆者の自己紹介です。自己紹介が必要だったことは、この手紙の執筆事情から理解できます。これから、いつそう深い信仰の交わりの中で、物心両面の支援を受けてイスパニア伝道に行こうとしています。自分のことを知らない人もいたかも知れない。そこで自分は何者なのかを語るのです。

しかし考えてもみてください。自分を紹介するのに、自分はキリストの奴隷だと、真面目に言う人は、だれかいるでしょうか。しかしパウロは本当にそう思っています。ですから、てらうことなくそう書くのです。

この書き出しは、もとの文ではこうなっています。「パウロ、僕、キリスト・イエスの、召された使徒、選出された、神の福音のために」。このように読み下せば彼の息づかいが伝わってきます。

彼は、パウロと名のつて、すぐに自分を、僕、と言うのです。キリスト・イエスの僕と言うのです。

「僕」と訳された言葉は、新約聖書では、召使とか、部下というように訳されているところもありますが、多くは奴隷と訳されています。パウロは、自らを、キリストの奴隷と見えています。

パウロはユダヤ人ですが、パレスチナ生まれのユダヤ人ではありません。小アジアの港町タルソ出身で親の代からローマ市民権を持つ者です。奴隷の身分ではない。パウロが自分を僕、奴隷というのは、一つの比喩です。

奴隷とはどのようなものでしょうか。それは生きるために自分の権利いっさいを失った者、あるいは放棄させられた者のことです。彼は主人のものです。キリスト者は自分の生をただ神から受け、ただ神のために用いる、その点で、まさにイエス・キリストの所有であり、奴隷、僕でありました。そのことをパウロは一四章八節にこう書いています。

わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです（一四・八）。

これがキリスト・イエスの僕としてのあり方です。私どもにおいては、どうでしょうか。もし自分の人生を自分で規定してみなさいという問題が出されたら、どのような答案を書くのでしょうか。パウロのようにには書けなくても、同じような思いをもって与えられた人生を歩みたいものです。

3 信仰の従順

いまパウロの自己紹介、キリスト者としての自己認識に、今日は一節によって、取り組んでいます。「キリスト・イエスの僕、神の福音のために選出され、召されて

使徒となったパウロ・・・」。この中の「神の福音のために」という部分、もつとも重要な「福音」は今日は取り上げません。来週（一・八〜一七）に回し、それ以外のところを取り上げます。

「選び出され、召されて使徒となった」、この部分は、五節以下で、次のように更に詳しく述べられています。

わたしたちはこの方により、その御名を広めて「御名のために」、すべての異邦人を信仰による従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召されたあなたがたもいるのです。――神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ」（五〜七節）。

一節の「選び出され」（「選び別たれ」口語）は、聖なるものとして区別される、特別のものとされるといふことです。「召される」は、何かのために召される、つねに目的と関連する言葉です。

パウロは、自分は「使徒」として選び別たれ、召されたと言っています。使徒とはむしろ遣わされた者という意味ですけれど、代わって遣わされた、キリストの全権をになって派遣されているということです。それは、異邦人「ユダヤ人から見ても、他の諸国民」を信仰の従順へと導くためです。たんに信仰へと導くため、というのではありません。信仰の従順です。従順とは、耳を傾ける、従うということです。パウロは自らをキリストの僕と規定しました。そこまで聞き従うことです。私どもたんなる信仰にとどまっていられないでしょうか。聖書の信仰は、パウロが宣べ伝えた信仰は、信仰の従順にまで進んでいくことを求めています。イエスに従うこと、自分を従わせることです（コリント一、九・二七）。イエスの生き方に倣うことです（ローマ一五・五）。信仰は、御言葉に学び、これに聴き従って歩むところにあるのです。この世に倣っていては困るのです。

さて宛先であるローマの信徒たちについても、パウロが、自分について一節で使っているのと同じ言葉を、ここで使っていることに注意したいと思います。それは「召されて」という言葉です。

使徒としてであれ、信徒としてであれ、私どもはみな神の「召し」を受けているのです。神の召し、神のゆるしと呼びかけなしに、私ども、だれもキリストのものとなることはありません。いまこうして礼拝にあずかり、御言葉に耳を傾けるということ自体、神の選びと召しなしにはない。じつに教会とは、神のエクレーシア「新約で教会を表す言葉。呼び集められた者たちの群れ」です。

そのような召しが、イエス・キリストを中心とした教会の交わりをつくり上げるのです。なるほどパウロはまだローマの教会を見てはいない。見てはいないけれど交わりが成り立っています。互いに神の召しにあずかっているからです。そして彼はローマの教会のために、祝福を語るのです。「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和があるように」（七節）。神の召しにおいて結ばれ、互いの信仰の励ましによって、私どもも教会を建て上げてまいりましょう。（一・八）